

2020年度 群馬大学共同教育学部
推薦入試・帰国生入試問題

特別支援教育専攻

小論文

【注意事項】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め4枚、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

特別支援教育専攻 小論文

問題 1

以下の文章の著者は、「大事なことは1人で考えることをおろそかにしないことだ」と述べていますが、それはなぜですか？ 本文の内容を踏まえて400字以内で述べてください。

このごろ「協調学習」という言葉もよく耳にする。生徒が机におとなしく座って先生の話聞くこれまでの授業スタイルから、グループでいっしょに作業したり、ディスカッションしたりするスタイルに変わりつつある。これは認知科学的にとっても意味があることだ。まず、自分の考えを他の人に話すことは、考えを明確にし、整理するのにとても役立つ。自分でわかったつもりでいたことでも、いざ人に説明しようとするとうまくできないことがある。すると、自分で何が理解できていないのかがわかるのである。

複数の人が集まって考えを出し合うことで、自分では考えつかなかった視点やアイデアに気づくことができるという利点もある。実際、社会ではほとんどのプロジェクトは複数のメンバーで行う。多様な視点、価値観、知識、スキルがシナジー効果を生む。コラボレーションをうまく行うためには経験が必要だ。だから、学校でコラボレーションによってプロジェクトをまとめる練習をすることはとても大事である。しかし、複数の人が集まれば、いつもプラスになるというわけではない。

大事なことは、1人で考えることをおろそかにしないことだ。アンダース・エリクソンは、超一流の熟達者ほど1人での練習に時間をかけるという結果を発表している。世界クラスのチェスプレイヤーたちに、1人で勉強する時間とトーナメントで試合する経験とでは、どちらが大事かを聞いたところ、1人で勉強する時間のほうが大事だという答えが大半だったそうである。

机の前に座って受動的に授業を聴き、覚えることを主としたこれまでの学習スタイルがよいと言っているわけではもちろんない。しかし、自分にしかない知識やスキルと、探究エピステモロジー(註)がなければコラボレーションに貢献できない。他人にはない知識、スキル、考え方を持つには、自分で工夫しながら自分ひとりで学ぶ習慣と学び方を子ども時代に身につけていかなければならない。

探究人を育てるには自分が探究人になるしかない。これは親にも、教師にも、子どもに関わるすべての人-つまり社会に生きるすべての人間-に言えることである。日本のラグビーに奇跡をもたらしたと言われる監督エディ・ジョーンズさんのインタビュー記事を読んだ(2016年2月3日付朝日新聞)。探究人を育てるための真髓が短い記事に凝縮されていた。

エディさんは言っている。

私たち人間は、楽な方に進みがちです。変化することは、いつだって難しいもの。だから、日々の生き方、考え方から変えていけたらと思っています。ほんの 3~5% の小さな意識の変化。それが、大きな違いを生むのです。

エディさんは、日本人は従順であるように教育されている、とも言う。その日本人選手をエディさんが極限まで追い込んで変えようとしていたこと。それは選手が「自分で考える」意識をつくることだった。

これはそのまま学校教育の目標にもなる。協調学習をしさえすれば主体性が身につくわけではない。やりかたが悪ければ、むしろ他人任せの学びを助長してしまう。超一流の達人に共通したことは自分の学びを自分で工夫していることだ。自分の現状を的確に分析し、弱いところ、克服すべき課題が自分でわかり、自分でそのための学びを工夫できる。そのような自律的な学び手になることこそ、学校教育の目標とするべきだ。そしてそれを支援できるように指導者は自分の学びを深めていかなければならない。

(註) エピステモロジー：科学的知または科学的思考を批判的に検討すること。

(出典) 今井むつみ (2016) 学びとは何か—〈探究人〉になるために—。岩波新書, p222-225.

(出題のため一部改変)

問題 2

以下の文章を読んで、あなたが将来就きたいと思う仕事をイメージし、仕事について本文を踏まえて、あなたの考えを 600 字以内で述べてください。

「仕事」というのは、実に多くの意味で使われている言葉である。たとえば、僕のような理系が最初に思い浮かべるのは、力と距離を乗じて得られる物理量である。だから、仕事というと、ワークよりもエネルギーを思い浮かべてしまう。しかし、この本で使われる「仕事」はそうではない。働いて金を儲ける行為のことだ。

働くだけの仕事というものもある。たとえば、部屋の整頓をするとか、庭掃除をするとか、洗車するといった作業である。こういったものを「仕事」と言う人もいるし、いやそれは仕事じゃないでしょうと言う人もいる。しかし、テレビを見るとか、ライブに出かけるというのは、明らかに仕事ではない（なかには仕事の人もいるけど）。

部屋の整頓が、テレビを見るのとどう違うのかといえば、それは「やりたくないけれどやらなければならない」かどうかにあるだろう。微妙なところだが、だいたいこのあたりに線引きがありそうだ。つまり、仕事というのは、抽象的に表現すると、「したいという気持ちはそれほどないけれど、それをしないと困ったことになるからするもの」ということになる。「金を儲ける」というのも、金がないと生活に困るからである。したがって、この定義でカバーできるだろう。

ところが、「したい」という気持ちがある仕事もある。やる気満々で仕事をする人がけっこういるようだ（部屋の整頓だって大好きだという人がいる）。「仕事が生きがいだ」と嬉しそうに語る人だっている。どうしてそんなことを自慢するのかよくわからない。ただ、「仕事はつらいもの」という常識があるからこそ自慢になるわけだ。もう少し詳しく分析すると、仕事の中に楽しみを見つけている、というだけのことで、仕事が全面的にすべて楽しいという意味ではないはずだ（なにしろ、休日には仕事を休んでいるのだから）。また、本人が自己暗示にかけて、「これは楽しいことなのだ」と自分を騙している場合もときどき見受けられる。仕事が楽しいと語っていた人が、次に会ったらその仕事を辞めていたというケースが多い。きっと、目が醒めたのだろう。

(出典) 森博嗣 (2013) 「やりがいのある仕事」という幻想. 朝日新書, p30-31.

(出題のため一部改変)